

## 8

## 月形町の米づくりの歴史

わたしたちは、月形樺戸博物館<sup>かばとはくぶつかん</sup>でいろいろな物を見ました。その中に、太い丸太の中をくりぬいたものがありました。

「これは樺戸集治監<sup>かばとしゅうちかん</sup>の囚人<sup>しゅうじん</sup>たちが山から水を引いて、飲み水にするためにつくった水道管<sup>かん</sup>です。」という説明<sup>せつめい</sup>を聞いて、わたしは、「こんな太い丸太を、どのようにしてくりぬいたのだらう。」とふしぎに思いました。そして、囚人<sup>しゅうじん</sup>たちの中には、すばらしいぎじゅつを持っていた人もいたんだなあと感じました。

教室にもどって、博物館<sup>はくぶつかん</sup>で見てきたことを発表し合いました。わたしは、博物館<sup>はくぶつかん</sup>で見てきた囚人<sup>しゅうじん</sup>たちのつくった水道管<sup>かん</sup>のことを発表しました。明さんが、「田んぼの水はどうしたんだらう。」と言うと、とし予さんが、「そんな昔に、田んぼ



きゅうかばとしゅうちかんほんちようしゃ  
旧樺戸集治監本庁舎



はくぶつかん  
博物館で見たもの

なんてあったのかなあ。」と言いました。

そこで、わたしたちの町で米がつくられるようになった<sup>れき</sup>歴史や、どのようにして今のように水田が多くなったのかを調べることにしました。

## かんこく 監獄水田

明治の初めごろ、北海道では、道南の<sup>どうなん</sup>函館<sup>はこだて</sup>付近でしか米づくりが行われていませんでした。月形では、明治17(1884)年、<sup>しゅうちかん</sup>集治監の人たちが元の町えいスキー場の下に、<sup>アール</sup>30aほどの水田をつくってみました。米づくりに必要な水<sup>ひつよう</sup>は山から引いて間に合わせましたが、<sup>ざんねん</sup>残念ながら実はなりません。日光が水田に十分に当たらなかったからです。<sup>まわ</sup>周りに大きな木がたくさん生えている森林があったこと、近くにぬまや、さわがあり、きりがかかることが多かったこと

が原いんです。そのため、米づくりはなかなかうまくいきませんでした。

それでも集治監（監獄）の人たちは、あきらめずに何回も米づくりにちょう戦して、水田を少しずつ広くしていきました。そして、明治26（1893）年、70aほどの水田で実がなりました。10aあたりおよそ1俵（60kg）、70aで7俵（420kg）の米をとることに成功しました。今の米づくりでは、少なくとも10aあたり8俵（480kg）ぐらいとれるそうです。今の米づくりにくらべると、とれる量は8分の1ほどにしかならなかったことがわかります。

その後、水田は知来乙・南耕地など、平地で日当たりのよい場所へと広げられていきました。そして、囚人たちの手によって須部都川上流から、はば3m・深さ3mの用水路が



当時の水田のあったところ



## 用水路

くられ、その長さは全部で約7kmにもなりました。

この工事は、明治36（1903）年から明治38（1905）年まで3年間かかり、働いた囚人ののべ人数は約44,000人とされています。

この工事のおかげで、監獄水田200haのほか、農家の人が持っていた300haの水田や、新しくつくられた300haの水田で米づくりができるようになりました。

その後も、小さな水路をつくって水を引き、水田がふえていきました。そこで、水田に引く水をうまく利用するために、明治42（1909）年に海賀直常という人が組合長になり、月形村土工組合ができました。

札比内でも、河村諭一という人が中心となって、札比内土工組合をつくり、昭和2（1927）年に札比内川上流に貯水池を完成させました。また、南札比内地区では、昭和25（1950）年ころから、地下水をポンプでくみ上げて、畑を水田にする新しい方法も考えられました。こうして、札比

ない内でも広く米づくりが進められていきました。

二つの組合は、昭和41（1966）年に一つになり、月形土地改良区かいりょうと名前を新しくしました。そして、さらにたくさんの貯水池ちよをつくったり、客土きゃくとをしたりして、水田をふやしていきました。

今では、月形ダム、豊ヶ丘貯水池とよがおかちよなど五つのダムや貯水池ちよが田畑をうるおしています。

また、水が引けないために米づくりができなかった、月浜・昭栄・共和地区しょうえい きやうわでも、昭和39（1964）年に篠津運河しのつうんが頭首工とうしゅこうができ、石狩川いしかりの水りを利用して、水田がつくられるようになりました。

このように、月形で米がつくられるようになるまでには、長い間、たくさんの人々の苦勞くろうがあったのです。



いしかりがわとうしゅこう  
石狩川頭首工



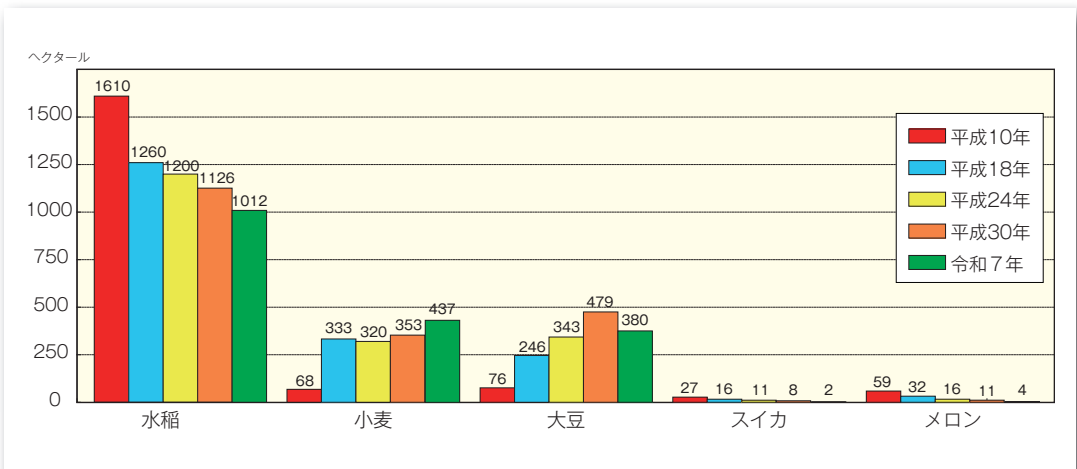
月形ダム

## これからの問題

あれ地を切り開き、水を引き、大変な苦勞をしてふやしてきた水田ですが、今はその水田がへっています。昔にくらべてお米を食べる人が少なくなってきたからです。そのため、水田を休ませたり、畑にかえなければならなくなっています。

苦勞して水田をふやしてきた人たちにとって、こんなにつらいことはありません。しかし、農家の人たちは休んでいる水田を利用して、メロンやスイカ、花や小麦、大豆などをつくっています。中でも花やメロンは本州方面にも送られ、全国的にも有名になりました。

げんざい、農家の人たちは、後継い者不足などの問題に頭をなやませています。月形町では、新しく農業を始める人を助けるしくみを整え、活力ある町づくりをめざしています。



しゅようのうさくぶつさくつけめんせき へんか  
主要農作物作付面積の変化